

馬内侍集覚書

一八

馬内侍集覚書

本位田重美

一

馬内侍集には、群書類従、新三十六人集などに収められている流布本と統群書類従本とがあり、統類従本は流布本に比べて八首歌数が多い。

八首のうち次の六首は、その詞書が新古今集・新千載集・後拾遺集・続古今集・拾遺集などの勅撰集に採録されたものと同じであるから、おそらく後になってそれらから増補されたものと思われる。今、これらを勅撰集採録のものと対照して左に掲げる。番号は統類従本の番号である。

馬内侍集

勅撰集

一四

新古今集恋三(一一六一)

人に物いひはしめて

人に物いひはじめて

わすれても人にかたるなうたたねの夢みて

わすれても人にかたるなうたたねの夢みて

後も長からぬよを

後もながからじよを

一六

したのはかまのこしむすひて謙徳公の
許に遣しける

人しれず思ふ心のしるればゆふともとけ
よ君かしたひも

二〇九

入道前太政大臣兵衛佐にて侍ける時一
条左大臣家にまかりそめてかくなんあ
るとはしりたりやといひをこせて侍け
る返事に

春雨のふるめかしくもつくる哉はやかしは
木のもりにし物を

二一〇

時々物申侍ける人の住吉にまうてゝい
はての杜の紅葉こそまだしかりつれと
いひをこせて侍ける返しに

君にしも秋をしらせぬつの国のいはての森
をわか身とも哉

二一一

拾遺集第九雜下 内侍馬か家に右大將
実資かわらはに侍ける時こうちにまか
りたりければものかゝぬさうしをかけ
物にして侍けるを見侍て

小野宮太政大臣

新千載集窓一（二〇一二）

下の袴の腰に結びつけて謙徳公の許に
遣しける

人しれず思ふ心のしるればゆふともとけ
よ君が下ひも

後拾遺集雜二（九三三）

入道前太政大臣兵衛佐にて侍りける時
一条左大臣の家にまかりそめてかくな
んあるとはしりたりやといひおこせて
侍りける返事によめる

春雨のふるめかしくもつづるかなはや柏木
のもりにし物を

統古今集恋三（一二〇三）

時々物申しける人の住吉に詣でゝいは
での杜の紅葉こそまだしかりつれとい
ひおこせて侍りける返事に

君にしも秋を知らせぬ津の国のいはでの杜
をわが身ともがな

拾遺集雜下（五五三）

内侍馬が家に右大將実資が童に侍りけ
る時暮打ちに罷りたりければものかゝ
ぬさうしをかけ物にして侍りけるを見
侍りて

小野宮太政大臣

いつしかとあけて見たれば浜千鳥跡あるこ
とに跡のなき哉

二二二

かへし

とゝめても何にかはせん浜千鳥ふりぬる跡
はなみに消つゝ

いつしかと明けてみたらば浜千鳥跡あるこ
とに跡のなき哉

同右（五五四）

かへし

止めても何にかはせむ浜千鳥ふりぬる跡は
浪に消えつゝ

最後の二首は、詞書にも「拾遺集第九雜下」とことわつてあるので、これが勅撰集から後に増補したものであることは、論ずるまでもない。二〇九・二一〇の二首も、その位置が卷末にあること、詞書が勅撰集のものと同文であり、しかも内侍の体験事項を表わすのに回想の助動詞の「けり」が用いられている点から、やはり勅撰集よりの補入歌であると判断される。馬内侍集の詞書に見える回想の助動詞は、たとえば卷頭から順次挙げてゆくと

……けじめも見えじかくすくなければとおほせられしかば

……これがちる心よめとおほせられしかば

七月七日にはすのたまをつくりてさりにし人のおこせたれば

さりにし人のもよりいかにぞや人やかたらひたる……

……あふぎをわが心かはりなばおこせよとの給ひしかば……

のように「き」系統のものが用いられ、自撰集をもとにしたものであることがわかる。従つて、著者の直接体験事項を「けり」で表わした二〇九・二一〇の詞書は、勅撰集の方から転載したものと見なければならぬのである。一四・一六は、集の中間にあるので、流布本系の脱落と見るか、それとも続類従本が補入されたものと見るか、問題はあ
るが、一六はやはり「けり」を用いてあるので、新千載集よりの補入と見た方が当たっている公算が多い。一四の方

は、このような決め手がないのでいずれとも決定しがたい。ただ集中の勅撰入集歌（続詞花集や秋風和歌集のような私撰集をも含めて）の詞書を勅撰集のものと比較すると、勅撰集ではすべて何らかの手が加えられており、一四のような全く同文のものは他に例を見ない。それで、いちおう一四も勅撰集から補入されたものと見ておきたい。

次に、残りの二首は八四と一六〇で、これらはそれぞれ次の歌の詞書とともに欠脱している。すなわち、

八四 ほとゝきす忍ふる物をかしは木のもりても声の聞えける哉

あせちの大納言むかしは物なと聞えたるをのちはほかにて人かたらふときとて

「あせちの大納言……」は、八五の「沢に皆おりたちぬとも」の詞書である。

一六〇 さゝの葉にあられ降夜の寒けきに独はねなん物とやは思ふ

かたらふ人えあふましきことありて外へゆくとして

「かたらふ人……」は、次の一六一の「よしさらは恋しきことを」の詞書である。このような現象は、流布本系の脱落と見るより説明の仕方がないであろう。

以上によって、現存馬内侍集の祖本は、流布本に八四の歌、八五の詞書、一六〇の歌、一六一の詞書を補ったようなものであったと考えられるが、それにもまたすでにいくつかの錯簡、脱落が見られるようである。まず錯簡については

人おほくかたらふとてあるきんたちのもとり

二〇 色々の花のなかにも女郎花いかなる枝に露とまらむ

をんなのともたちのもとに久しくとはぬことといひて

二一 つらからば扱もやみなで春の日のうらみまほしき蟹にも有哉

二〇はある君達から内侍に贈られた歌であるが、この次に当然あるはずの内侍の返歌がなく、内侍と女友達との贈答

歌がこれに続いている。ところが、そこから二十七首隔てて

たつた山に二日計ありてたつ田山もいかゞとて

四八 吹風にげになびかずはをみなへし忍びにかゝる露をしらなん

とあれは

四九 さかのいろなるこころとやきく

といひしかば

五〇 をみなへしつゝむ我身は野へなれや

という贈答があり、この四八番の詞書はどう見てもこの歌につくものとは思われない。この歌はおそらく二〇番の歌と関係があるのであって、二〇番の返歌として、内侍が吹く風になびいて情の露を受けるといふようなことはないといった意味の歌をよんだのに対し、男がさらに贈ったのが四八番なのであろう。すなわち、二〇番の返歌が脱落し、さらにそのあたりから錯簡が生じていると見られる。また

おなじ君九月ばかりに

聞流本

五一 おもふ人やゝすきぬとや菊の花雨をきても露にぬるらむ

ほかにとてかへしつなとかをとほのといひたりしかはみつからきたるにあはねば九月九日菊にさして

五二 菊のうへの露をはをきて涙こそわたの衣の袖もかはかぬ

しのびたりし人のもとより

五三 あさごとはなかるゝ床のまくらかな我もうき木の心ちのみして

五一、五二はともに男の歌であるが、これに対する内侍の返歌はなく、五三では、一転して「しのびたりし人」との贈答となっている。ところが、そこから十首隔てたところに

人のきたるにわたのころもとたのめやしけん

六三 流れゆく言のはにこそ白露のいのちをかけてをきかへりつれ

の一首があり、詞書の「わたのころも」は五二の歌を受けていると考えられるので、これを内侍の返歌と見ることもできようかと思われる。そうすれば、ここにも錯簡があるということになる。

次に、四八番の歌の前に内侍の返歌が脱落しているらしいことは前述したとおりであるが、同時に、四八番の前書「たつた山に二日計ありてたつ田山もいかゞとて」も、これを受けていると認められる歌が集中に存在していないようであるから、当然ここにも脱落を考えなければならぬであろう。また

この男よをかねたる夜夢にや見えけん

四三 思ひつゝぬるよの夢をしらぬ身は胸にたく恋さめだにもせよ

四四 長閑なる春の浦にもすかためは猶こゆるきのいそかしやなそ

の一連も、四四番の方は「よをかねたる夜夢にや見えけん」という詞書にはふさわしくない。あるいは

ある人心うきことやありけん

一一一 人心よしみつしほの今よりはわれつらくとも田子の浦なみ

の返歌なのではないかと思うが、どうであらうか。一一一番の後にも当然あるべき内侍の返歌が欠脱しているのである。が、それはいずれにせよ、四三と四四との間に脱落を考えることだけはしなければならぬであろう。

まだ外にも疑わしいところはあるけれども、その問題はこの程度に止めておいて、次に、詞書から考えて、あるいは他本よりの補入または竄入かと考えられるものを一二指摘しておきたい。

かくてその冬うちとけてもあはざりければ年かへりて二月ついたち比につはみたる花にさして

三六 あたにはとたのみし風しあらからは盛もなくて花や散なん

返し

三七 風もあらく花も程なく散ゆかは憂身をいかになりねと思ふ

もとの人なと聞つけてさわかしくてえあはぬなりけりおなし人心うきことやきけんこしたれは女もむつかりてあは

さりければ五月五日に男

三八 うきことをいつ忘れてか菖蒲草たえぬしたねを立るまつらん

かへし

三九 忘れぬうきにつけても菖蒲草いかに下根のなからぬやは

め流本

三六番の詞書の「あはざりければ」は、内侍の直接体験事項であるから、前掲の、集の用語例に従えば、もちろん「あはざりしかば」とあるべきところである。三八番の「女もむつかりてあはざりければ五月五日男」も「あはざりければ」はもちろんのこと、「女」「男」という表現も、他から見た書き方であって自撰集としての表記にふさわしくない。あるいは、誰かの家集か私撰集のようなものから内侍の歌を書き抜いておいたものが竄入したのではないかと疑われる。

兵衛のすけなる人かたらふとみな人きゝて後中将にふみかよはしければ人のきゝていひたる

九四 かしは木は雨も人めもしげしとて三笠の山にふみかよふとか

この詞書も内侍の書いたものとは思われない。やはり後人の書き入れが本文に竄入したものではなからうか。なお、この兵衛佐は道長であろう。前掲の二〇九（後拾遺集から補入されたもの）に見えるように、道長が兵衛佐であったころ、内侍と関係があったのである。おそらく道長が、二〇九の詞書のように、一条左大臣源雅信の女倫子（頼通、能信等の母）と結婚して内侍と疎遠になったころ、内侍は、当中将であった男、たぶん公任——公任との贈答も集に見える——などと交渉を持つようになったのではないかと思われる。とすれば、この歌は、

左大将兵衛佐にておはせし時うづきに物をいひそめたまひて

八三 郭公声をはきけと花のえにまだふみなれぬ物をこそ思へ

かへしかしは木のわかき葉にさして

八四 ほととぎす忍ふる物をかしは木のもりても声の聞えける哉

などの贈答の註として書き入れてあったものかと考えられるのである。

二

以上のように馬内侍集には錯簡、脱落、竄入などが相当にあり、その内容的研究を行なうことは容易でない。今、集中の人物考証に限定しても、たとえば、集にしばしば登場する左大将という人物が関院大将朝光をさすか、あるいは道長をさすかという点についても、古来両説があつていづれとも決定されていない。すなわち、

(A) 左大将ひさしくをともし給はて

六 あふことのなきさなれはや都鳥かきりて跡もたえてとひこぬ
うらみ流本

これは続後撰集恋四に採られていて、作者は法成寺入道前撰政太政大臣となっている。道長のことである。秋風和歌集恋中でも道長ととっている。

(B) その夜たひなる所にきあひて枕もなけれは草をむすひてしたれは

八 あふ事はこれやかきりの旅ならん草の枕も霜枯にけり

(A)の歌に続いて馬内侍の返歌があり、これはそれに続いた一首であるから、作者は当然(A)と同じでなければならぬ。ところが、新古今集恋三にこの歌がとられ、作者は左大将朝光となっている。

(C) ひさしくありておぼしいでて

二五 程ふれはわすれやしに春雨のふることのみそ我はこひしき

は流本

これは「左大将殿かへり給ひて雨ふるにいはると聞給ひて」という詞書を持つ二四番の歌に続いているのであるが、風雅集の恋四にこの歌がとられ、作者は左近大将朝光となっている。

(D) 左大将ちかことふみをおこせ給ひてかはりのふみをこせよとせめ給ひしかは

八一 千早振かもの社の神もきけ君忘れずは我も忘れじ

この歌は千載集恋五に入り、詞書に「左大将朝光ちかことふみを書きて………」と記している。

(E) 左大将兵衛佐にておはせし時うつきに物をいひそめたまひて

八三 郭公声をはきけと花のえにまたふみなれぬ物をこそ思へ

これは前にも引用した歌であるが、新古今集恋一にとられ、作者は法成寺入道前撰政太政大臣（道長）となっている。以上のように、同じ左大将という人物を、続後撰集では道長、千載集、風雅集では朝光と解し、新古今集では(B)を朝光、(E)を道長としている。朝光も安和二年に右兵衛権佐を経ているから、(E)も朝光と見てよいはずであるのに、新古今集で特にこれを道長としたのはどういう理由によるのであろうか。

朝光が馬内侍と交渉のあったことは、閑院左大将朝光卿集に

父おとどの御服にてもし給ふに、内より馬内侍を御使にてとはせ結へるに、その夜とゞめてあかつきに
いかでかは夢にも人の見えつらむ物思ひそめし後は寝なくに
返り

嘆きつゝわれも寝なくに見ゆる夢の慰む方はなきとこそ聞け

とあるのを見れば明かである。父おとどは兼通で、兼通の死は貞元二年十一月、朝光が二十七歳、大納言のころのことであった。

ところで、この歌の「物思ひそめし後は寝なくに」というあたり、いかにもなれそめといった感じが強いが、そうすると前掲(E)の兵衛佐を朝光とし、馬内侍との初会を兵衛佐時代（朝光十九歳）と見ることは困難となってくる。新古今集の撰者が(E)を朝光と見なかったのはそのためであろうか。それに、(E)の左大将が朝光でないとするならば、集中の左大将はいちおう同一人物と見るべきであろうから、これを朝光と見ること自体が問題となるのではなからうか。

もう一つ、この疑問をたすけるのが、前掲の

あせちの大納言むかしは物など聞えたるをのちはかにて人かたらふとききて
八五 沢に皆おりたちぬとも葉を若みわかかりそめし淀の菖蒲は

の詞書である。按察使大納言は、朝光、済時のいずれかであろう。大納言朝光は永延二年按察使、翌三年には大将を辞しているから、按察使大納言と呼ばれうるのはそれ以後のことであろう。その後正暦四年に按察使をとどめられたが、その後任となったのが大納言済時であった。しかし、済時は永祚二年以来左大将であったから、呼名としてはやはり世に言われる小一条大将の方がふさわしかったはずである。それに、済時は馬内侍と交渉のあった形迹はないから、この按察使大納言は朝光と見るべきかと思われる。とすると、朝光のことが集中に按察使大納言、左大将という二つの呼名で現われてくることになり、左大将を朝光とする説はますます疑問となってくるであろう。

三

そこで、集に登場する人物の呼名についてすこし考えたい。まず

人かたらふと聞給ひて中関白

一〇四 あやしきはぬれぬ人なき染川のかゝらぬ神袖流本もくちはてぬべし

○

中関白殿おはせんとのたまひてまへわたりたち花のかきりおらせてすき給ひぬれば

一一二 こち風にこのみしるくてたち花のためしことのすきぬめる哉

中関白は道隆である。道隆が関白になったのは永祚二年五月のことであるから、この呼名はもちろんそれ以後のこと
でなければならない。ところで、馬内侍と道隆との交渉については、ひじょう問題になることが一つある。それは、

こよひかならずこんとてこぬ人のもとに

一六三 やすらはでねなまし物をさ夜更てかたふくまでの月を見し哉

の一首で、これは誰も知っているとおりの百人一首に赤染衛門の作として採られているものである。後拾遺集恋二にも
赤染の作として入っており、それには「中関白少将に侍りける時はらからなる人に物いひわたり侍りけり、たのめて
こざりけるつとめて、女にかはりてよめる」という詞書がついている。赤染衛門集にも「中の関白殿の藏人の少将と
きこえし頃、はらからのもとにおはして……」とある一連の中にこの歌が見えるから、この歌は、道隆の藏人少将時
代に赤染衛門のはらからのところに通っていた頃、そのはらからに代ってよんだものだといふことは、まず疑う余地
がない。ところが、その歌が馬内侍集の中に見えているのである。とすると、馬内侍と赤染衛門とは実は姉妹だった

のではなからうかと考えられてくる。しかし、記録の伝えるところでは、馬内侍は右馬権頭源時明の女、赤染衛門は右衛門尉赤染時用の女で、この二人の姉妹關係を証明する資料は何もない。そこで、契沖の百人一首改觀抄のように「はらから」を親しい交友の意に解する説も出てくるわけであるが、しかし、虚心に考えれば「はらから」はやはり姉妹の意とするのが至当であつて、この間には何か特殊な關係の伏在していることが感じられる。事実、諸家のすでに説かれているように、時明を馬内侍の実父とすることには疑問があり、また一方赤染衛門も平兼盛あるいは源順の女とする説があつて、この二人の出自についてはなお模糊としたところがはなだ多いのである。

しかし、この問題について深入りすることは今は避けておきたい。馬内侍が赤染衛門の姉妹であるにせよ、親友であるにせよ、赤染衛門のいう「はらから」が馬内侍をさすのなら、彼女と道隆との交渉は道隆の藏人少将時代、すなわち二十三・四藏ごろのことだということになる。もちろん一〇四番や一一二番の歌がその当時のものと考ええる必要はないが、かといつて、これらがそれから十五年以上も後の、道隆の関白時代のものとは、その内容から推して、どうも考えにくい。すなわち、この家集では、事件のあつた当時の呼名とは無關係に、家集編纂当時の呼名で記しているものと考えられる。次に、

あはたの右大殿夜ふかくかへらせたまひて日かけを給はせたりしかは御返きこえさせし

一四一 つゝめ共うきに人めの惜けれはあけは日影のまはゆからまし

あはたの右大殿は、もちろん道兼である。正暦五年八月右大臣、翌長徳元年四月廿七日関白となつたが、同五月八日に薨じた。世に七日関白と言われるほど在任期間が短かつたので、呼名としては、むしろ前任の右大殿の方が親しみ深かつたのであらう。なお、

將流本
右大殿ものしたまてのころいきところもしらてほかにあれば

一二三 忍ぶれは空に泪もきりみちて恋敷人やいつこなるらん

の作者を、新千載集恋一では東三条入道前関白太政大臣（兼家）としているが、どのような根拠があったのであろうか。時代も五百年近く隔たっている新千載集では、どうも簡単には信じられないような気がする。他の作者の呼名から推して、兼家なら、東三条殿とか法興院関白殿とかとあるべきであろう。私は、右大殿といえ、やはり道兼をさしていると考えたいのである。

以上、按察使大納言、中関白、栗田の右大殿についての考察が認められるなら、この家集における呼名は正暦末年頃のものとすることになる。それは同時にこの家集の執筆時期を示すことにもなるであろう。

ところで、左大將は誰のことであろうか。永祚二年六月一日左大將になった済時は長徳元年（正暦六年）四月廿七日薨じたが、その後任となったのが道長であった。長徳元年の春から夏にかけて流行病が猖獗を極め、関白道隆、道兼、左大臣源重信、大納言朝光、済時など相ついで薨去したため、当時権大納言であった道長がまず左大將に任ぜられ、ついで六月十九日右大臣、氏長者となった。が、大將には翌長徳二年八月まで在任している。この集の呼名が正暦末年ごろを現在とするものであり、前述したように済時と馬内侍との間に交渉のあった徴証がないとすると、この左大將は道長と考えざるを得ないことになる。道長とは、この小稿の初めに掲げた後拾遺集雜二の詞書によって交渉のあったことが証明できるからである。

四

以上述べてきたところから多少結論めいことをまとめてみると、馬内侍集は、おそらく長徳二年の夏からそう遠く

ないころ、彼女の経てきた多くの貴公子との恋愛遍歴を思い出しながら書き綴った自撰家集で、想像を逞しくすれば、あの疫病の大流行で、かつての愛人であった人々が次々に他界していったことが成立の契機になっているように思われる。従って、原形はほぼ年代を追いつながら、それぞれの相手を中心にまとめられていたのではなからうかと想像されるが、脱落、錯簡が多く、さらに後人の補入や竄入が加わって、今日見るような混乱した姿になったのである。

註一 「日本文芸研究」七卷三号、拙稿「八代集の撰述態度」参照。

註二 鈴木一男氏は(B)の左大将も朝光と見ておられる。（「国文学」四卷四号「馬内侍」）

註三 「国文学」四卷四号鈴木一男氏「馬内侍」参照。

註四 「袋草子」上巻。

註五 「古今著聞集」巻五。

追記

本稿執筆の途中、子供が交通事故で入院したため、調査も行き届かず、論証にも不備や疎漏のできたことを残念に思う。不備な点はいずれ機会を見て補正することにした。

—— 関西学院大学文学部教授 ——